中沢浜貝塚出土の縄文時代人骨

－昭和62年度発掘資料－

札幌医科大学解剖学教室
百　々　幸　雄

昭和62年度の発掘調査において、２体の埋葬人骨が発見された。以下にこれらの人骨の人類学的所見を報告する。

Da27－１号人骨（図版１）　時期不明

上肢骨は右上腕骨の破片と左尺骨骨体が残存するのみである。下肢骨は左の寛骨と大腿骨上部三分の二、右脛骨上部三分の一、左脛骨骨体、右腓骨の小片、左腓骨骨体が保存される。頭骨と体幹の骨は欠損する。

四肢骨の太さ、筋付着面の発達状態からみて、**成人男性**の骨格と考えて良い。

上腕骨：右骨体下部の長さ７㎝程の破片が残存するのみである。

尺　骨：左の骨体が長さ約17㎝にわたって保存される。中央最大径は17㎜、同最小径は11㎜で中央横断示数は64.7となり、骨体中央部は著しく扁平である。

大腿骨：下端を欠損するが、左大腿骨の大部分が保存される。筋付着面の発達は良好で、特に殿筋粗面が強く発達している。骨体中央矢状径は28㎜、同横径は29㎜で、中央横断示数は96.6となる。中央横断示数が100以下となるのは縄文人では極めて珍しいことであるが、これは粗線の発育が弱いためではなく、横径が異常に大きいことに起因している。体上部最大径、最小径はそれぞれ33㎜、24㎜で、体上部横断示数は72.7となり、この部分は著しく扁平である。

脛　骨：右は上部三分の一が残るのみであるが、左は骨体がほぼ全長にわたって保存される。筋付着部の発達は良好であり、左右ともヒラメ筋線が著しく強く発達する。左骨体中央矢状径は31㎜、同横径は21㎜で、中央横断示数は67.7となり、体中央部はかなり扁平である。ヒラメ筋線が強いため、栄養孔部での横断示数は52.3となり、この部分は著しく扁平である。

腓　骨：右は小破片が残るだけであるが、左は骨体が比較的良く保存される。筋付着部は強く発達し、外面には凹溝形成も見られる。

なお、左尺骨の後縁、左脛骨の後面上部には、げっ歯類と思われる動物の咬痕が多数認められる。

Ce27－1号人骨（図版2）　縄文後期末葉

頭骨は大部分が残存するが、椎骨と四肢骨は小片が残るだけである。

頭　骨：顔面、前頭骨および右頭頂骨から右側頭鱗にかけての部分が欠損する。三主縫合は内、外板においてほとんど消失しているので、年齢は**熟年ないし老年**と推測される。乳様突起は強大で、筋付着部も強く発達するので、性別は**男性**と判定される。外後頭隆起はほとんど形成されないが、項平面の筋粗面は強い。乳突上稜、乳突上溝はともに良く発達する。舌下神経管は右は単一であるが、左は骨橋により完全に二分される。右は破損のため不明であるが、左に外耳道骨腫はない。鼓室骨裂開（フシュケ孔）も左右とも認められない。下顎では、やはり筋粗面が強く発達する。下顎角は強く外反する。右は破損のため不明であるが、左に顎舌骨筋神経管は認められない。

主な計測値は次のとおりである。バジオン・ブレグマ高134㎜。最大後頭幅113㎜。下顎枝高57㎜。下顎枝幅36㎜。

歯：下顎左右第1、第2大臼歯が残存する。下顎左第3大臼歯は歯根のみ残るが、右第3大臼歯は生前に脱落したものと思われる。咬耗はほぼ水平で、第1大臼歯でⅢ度、第2大臼歯でⅡ度の段階にある。左第2大臼歯歯頚部頰側面にはむし歯によると思われる腐蝕像が認められる。

椎　骨：第2頚椎歯突起と上位頚椎の椎体が残るのみである。

四肢骨：右上腕骨の骨体の小破片が同定される。三角筋粗面の発達は良好である。

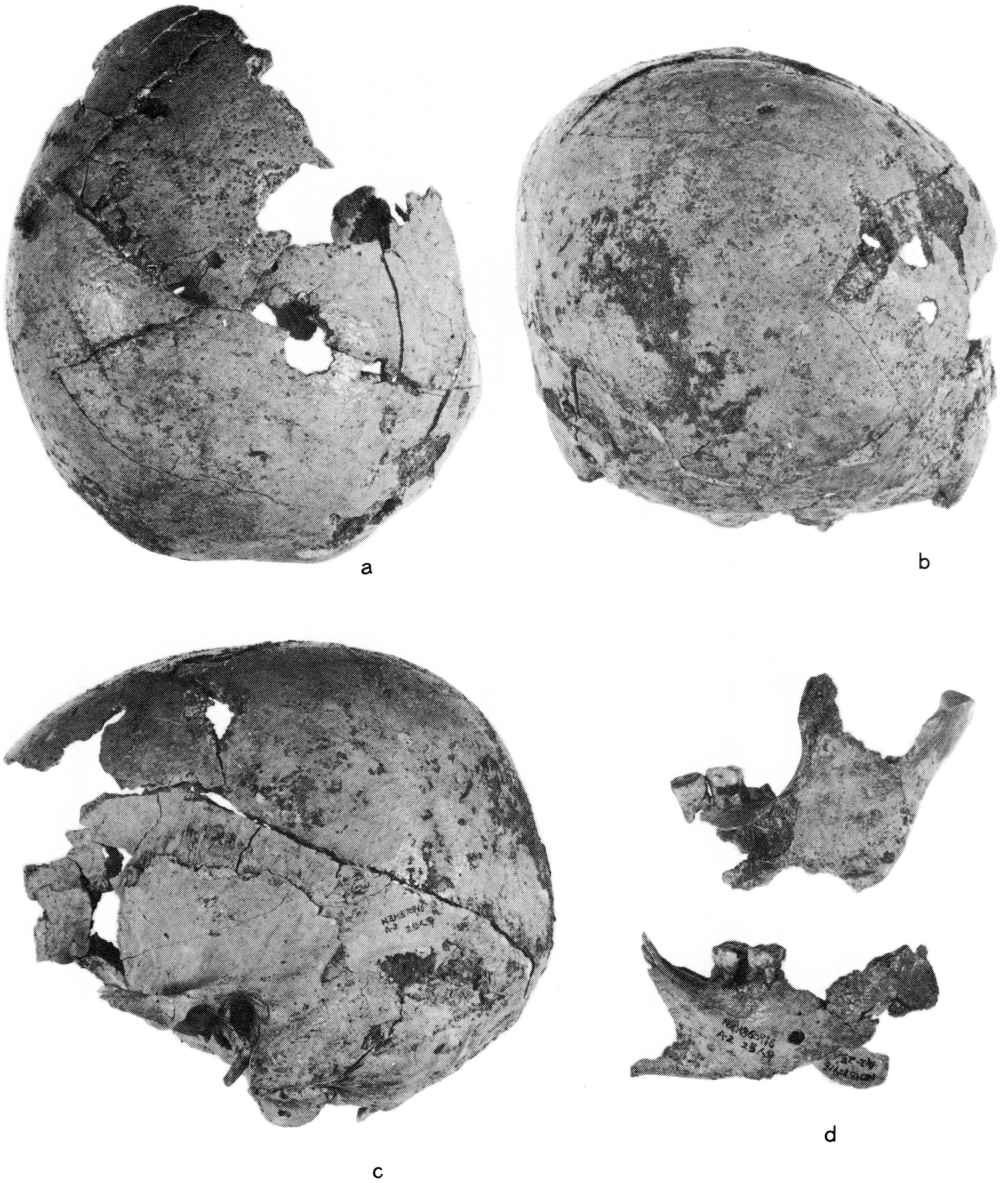
まとめ

1号人骨は成人男性の四肢骨からなる。大腿骨からなる。大腿骨に柱状性がみられないといった特異な点がみられたが、筋付着部が強く発達していることや脛骨が扁平であることなどを考え合わせると、やはり縄文人の特徴が表出されていると考えて良いであろう。

2号人骨は主として熟年ないし老年男性の頭骨からなる。乳突上稜が著しく強いほか、筋付着部が概して良く発達すること、歯の咬耗が著しいこと、舌下神経管が二分することなどに、縄文人の特徴が良く表れていると言える。

a．左　寛　骨
b．左　大　腿　骨
c．右　上　腕　骨
d．左　尺　骨
e．右　脛　骨
f．左　脛　骨
g．右　腓　骨
h．左　腓　骨

図版１　Da27－1号人骨



a．頭骨上面観
b．頭骨後面観
c．頭骨左側面観
d．下　　顎

図版２　Ce27－１号人骨